

特集 国際文化交流の推進

6 平成一二年 年頭の所感 ◇文部大臣 中曾根弘文

巻頭言 14 国際文化交流の推進

磯村尚徳

てい談 16

二千年紀の国際文化交流を考へる

——出席者 榎 泰邦 / 永井多恵子 / 林田英樹

論文 26 国際文化交流における美術館の役割

高階秀爾

エッセイ 30 人は民族に還る

横井 茂

32 ケルンにおける東大寺展 — D.F.アデーレ・シユロムス

事例紹介① 34 静岡発「希望の貌 (CREATING HOPE)」

「第2回シアター・オリンピッククス」開催

第2回シアター・オリンピッククス実行委員会

事例紹介② 36 藤野 アーティスト・イン・レジデンス

多様な価値創造に向けたネットワークの創出に向けて

神奈川県藤野町

事例紹介③ 38 敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究

東京国立文化財研究所

事例紹介④ 40 アジア太平洋地域文化遺産保護協力活動の

国内拠点奈良に開設

財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所

見聞記 42 山形県高校生代表訪中団

ハルビン市師範学校との交流会について

宝崎幸雄

解説 44

文化庁長官官房総務課文化政策室

44 文化庁の国際交流・協力に関する施策

48 国際交流基金による交流プログラム

51 日韓文化交流会議について

カラー

1 記念館めぐり ●かみの地を訪ね

稲沢市荻須記念美術館

(重知恵)

4 この道を行く

万世大路大滝宿跡

表2 名作シリーズ

無垢の笑い

表3 文化財紹介

特別史跡平城宮跡に
再現された東院庭園

12 私と教育、私として

川口和久

52 焦点 | 文教施策

64 中教審ニース

70 文部省 Q & A

72 都道府県発

●教育・学術・文化・スポーツニース

神奈川県小田原市、鹿児島県

74 めざせシドニー五輪

自転車競技

76 レッツ
トライノ

国立三瓶青年の家

78 海外教育ニース

80 刊行物紹介

82 インフォメーション

83 鑑賞席

84 編集後記

国際文化交流における 美術館の役割

国立西洋美術館館長
高階秀爾

1

東京上野の国立西洋美術館では、つい先頃、パリのオルセー美術館の所蔵品による「一九世紀の夢と現実」と題する展覧会が幕を閉じたばかりだが、その総入場者数は、五八万人余りという盛況であった。この展覧会は、東京展に先立ってまず神戸の市立博物館で開催され、そこでも五〇万人に近い観客を集めたというから、両会場合わせて、一〇〇万人を超える日本人がパリから招集された美術の名品を鑑賞する機会を得たことになる。

この数字は、むろんきわめて大きな意味を持っていると言わなければならない。それは、美術展覧会というものが、いかにまるものではない。国立西洋美術館では、オルセー展の前に、ウィーンのアルベルティーナ版画素描館の協力を得て、「記憶された身体—アビ・ヴァールブルクイメージの宝庫」と題する特別展を開催したが、この展覧会の総入場者数は二万九〇〇〇人余りであった。数の上だけから言えば、西洋美術館における入場者数はオルセー展の二〇分の一で、しかもこの展覧会は東京だけの開催であったから、オルセー展の一〇〇万人に比べれば三分の一以下ということになる。だがだからと言って、この展覧会の価値がそれだけ低いかというと、そういうことにはならない。たまたま続けて行われたこのふたつの展覧会の観客数のこの極端なまでの差は、むしろ逆に、入場者数という数字だけによって展覧会を評価することの危うさを如実に示してくれる好例と言ってもよいものである。

「記憶された身体」展は、内容の上から言っても、ラファエッロ、ミケランジェロ、デューラー、ルーベンスなどの素描やレンブラント、ゴヤの版画など、ウィーンにおいても平素は容易に見ることのできない超一流の作品を含み、来館者に

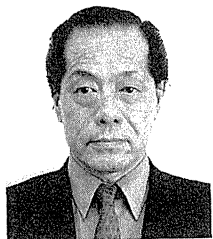
に人々の心に訴えるものであるかということ、雄弁に物語っているからである。オルセー美術館の名前は今では日本人のあいだでもかなりよく知られるようになってきたし、何よりも、マネ、モネ、セザンヌ、ルノワール、ゴッホなど、人気の高い画家たちの作品が揃っているというところが、これだけ多くの観客を集めた理由であろう。高名な芸術家の優れた作品であればあるほど、直接本物に接する喜びを味わいたいと思うのはきわめて自然な感情であるに違いない。

実際、この展覧会の際に観客に対して行われたアンケート調査を見ても、内容に関する意見では、大変すばらしかったという感想が多くあった一方で、物足りなかつたという不満を表明したもの

も若干あったが、そのほとんどは、かつて実際にオルセー美術館で見て感銘を受けた作品、あるいは画集などで知って期待していた作品が含まれていないことに對する不満であった。ということは、優れた芸術作品は一度見たらそれでよいというものではないし、また、いかに精巧な複製や画集が出来ていても、本物に接するという体験は何ものにも換え難い貴重なものだということである。美術館の基本的な役割が、作品の保存と並んで、優れた名品を出来るだけ多くの人々が鑑賞し得るような機会を提供する点にあることは、言うまでもない。

しかしながら、このオルセー展の場合もそうだが、ある展覧会の成果ないしは意義といふものは、入場者の数だけで決まらなかつた。大きな感銘を与えたが、それとともに展覧会の基本構想が、イメージの誕生、伝播、再生の秘密を具体例に則して探るという美術史研究の基本的問題と取組、そのみならず、人間の創造活動の根源を明らかにしようというきわめて新鮮な知的刺激に富んだものであったので、その試みは、国際的にも高い評価を得た。現にドイツのハンブルク美術館はその内容に強い関心を示し、その要請によって、東京展の後、ハンブルクで公開されることになった。つまり、日本のために組織された展覧会がドイツでも歓迎されたということ、いわば国際的な認知を得たわけである。したがって、カタログも、日本語版のほかに、ドイツ語版が作られた。もっとも、その点ではオルセー展の場合も同様で、それは単に有名な作品を集めただけというのではなく、明確な構想に基づいて一九世紀美術に対する新しい視点を提供しようとするもので、カタログも、日本語版とともにフランス語版が作られている。

だがそれでは、数字にはよらない展覧会の評価というものは、どのようにして決まるのであろうか。



たかしな・しゅうじ 東京生まれ。東京大学大学院在学中1954～59年フランス政府招へい給費留学生として渡仏、パリ大学付属美術研究所およびルーブル学院で西洋近代美術史を専攻。59年国立西洋美術館勤務。71年東京大学文学部助教授。79年同教授。92年国立西洋美術館館長。東京大学名誉教授。パリ第一大学名誉博士。芸術選奨文部大臣賞、翻訳文化賞、フランス・芸術文芸シュヴァリエ勲章、放送文化賞、フランス・芸術文芸オフィシエ勲章、フランス・芸術文芸コマンドール勲章、明治村賞、日本文化デザイン大賞受賞。著書「芸術のパトロンたち」（岩波書店）ほか多数。

今から十数年前、一九八六年、ワシントンで開かれた国際美術史学会において、当時世界の各地で頻りに開かれるようになってきた展覧会について、その意義や評価をどのように考えるべきかということが議論の焦点のひとつとなった。その時、ルーヴル美術館の絵画部長が、優れた展覧会の条件は三つあると提言して、参加者の共感を得た。いわばそれは、美術展覧会を評価する国際的な基準と言つてよいものである。その三条件とは、以下のようものである。

第一点は、一般に知られていない、あるいは容易に接することのできない優れた作品を公衆の鑑賞に提供することである。これは、新発見の作品や忘れられた芸術家の発掘ということももちろん含まれるし、ふだんは公開されていないコレクションや、簡単に訪れることのできない外国の作品を招来することも、それにあたる。

第二に、展覧会は、さまざまな作品を一室に集めて然るべき場面で展示すること。これらの美術展覧会が国際的な文化交流に果たす役割はきわめて大きなものがあるが、そこには、大別してふたつの側面がある。

ひとつは、もともと美術作品というものが、ある民族の歴史的文化的産物であるため、その作品に接することによって、異なつた時代、異なつた文化の理解に大



ことによつて、芸術家や作品について、あるいはその時代の社会や歴史について、さらには美や文化の本質について、それまでとは違つた見方、新しい知見、より深い洞察をうながすようなものでなければならぬ。優れた名品はそれだけで見る者に深い感動を与えるが、他の作品との対比のなかに置かれるとまた異なつた様相を見せ、多くの新しい情報を与えてくれる。それを可能ならしめるのは、適切なテーマ設定であり、企画構成力であり、それを支える詳細な調査研究である。展覧会のコンセプトがその成否を決定すると言われるのも、そのために他ならない。

そして第三点として、そのようにして得られた新しい情報や知見を記録に残すという努力がなされなければならない。展覧会そのものは、ある一定の期間の後場に終りを告げ、集められた作品はもとの場所に戻されるが、その実現の過程で蓄積された成果は、学術的、文化的財産として継承されるべきものである。その役割を担うのは、第一に展覧会のカタログである。カタログと言えば、特に日本においては、展覧会鑑賞の手引き、ないしは記念という性格が強いが、そのように大きく寄与するという面である。西洋の名作を日本に招来したり、逆に日本の優れた作品を外国で紹介するといった試みは、まさしくそのような文化交流そのものである。そもそも美術館の存在自体が、さまざまな背景を持った作品の収集、保存、公開を通じてそのような役割を担っている。

そこでは、ひとつひとつの作品が自国の

役割もむろん重要であるとしても、国際的には、そこに展覧会開催による学問的成果がどれだけ盛り込まれているかということが評価を左右する大きな規準となっている。また、カタログ以外にも、例えば展覧会と関連して講演会やシンポジウムなどが行われた場合、その報告もやはり記録として重要である。「記憶された身体展」の場合も、ドイツ日本研究所の協力を得て、ドイツおよび日本の各地から多くの専門研究者を招いて、三日間にわたるシンポジウムを開催した。その成果は、整理の上近く刊行される予定である。

3

以上の三つの条件は、美術展覧会を評価するにあつて国際的に認められた共通の規準、いわばグローバル・スタンダードとも言うべきものである。それにさらに加えて、一般観客への教育普及効果という規準もあり、そこでは、入場者の数がひとつの指標として考慮されるべきであろう。いづれにしても、名品鑑賞の機会の提供と並んで、さまざまな役割を担うべきである。

もうひとつの面は、特に展覧会の企画構成における国際的協力関係が果たす文化交流への貢献である。オルセー美術館展においては、その内容は、西洋美術館とオルセー美術館の担当者との度重なる綿密な討議によつて決定された。「記憶された身体」展は、日本の担当研究員と、ドイツ、オーストリアの専門研究者との共同企画である。有効な国際文化交流推進のためには、それぞれの分野における専門家のネットワークが不可欠であるが、美術館は、作品の保全に責任を持つとともに、美術に関する専門スタッフが揃つているという点で、まさしく国際交流の中心となる存在である。それは何も特別展の企画の時だけにかぎられるものではない。作品の調査研究の成果やさまざまな情報の交換や、貴重な作品の保護のための環境整備、保存修復技術の開発などの共同活動を通じて、平素から美術館同士の間で、優れた展覧会も実現される。その意味で、国際的な文化交流に果たすべき美術館の役割と責任は、きわめて重要であると言わなければならないであろう。

中央教育審議会 「初等中等教育と 高等教育との 接続の改善 について」答申

●巻頭言
初等中等教育と高等教育との
接続の改善に向けて——中曽根弘文
●答申に当たって
「初等中等教育と高等教育との接続の
改善について」の答申に当たって——根本一郎

●座談会
初等中等教育と高等教育との
接続の改善について
木村 孟／安西祐一郎／大田弘子
岡田修二／館 昭／本間政雄
●論文
安原義仁／矢野眞和
●エッセイ
川口順子
●事例紹介
神奈川県立麻溝台高等学校 ほか

◎文部時報2月臨時増刊号
中央教育審議会答申
初等中等教育と高等教育との
接続の改善について
2月下旬刊行予定

▽新年あけましておめでとうござい
ます。西暦二〇〇〇年という節目の
年を迎え、いつもとは違った気持ち
で新年を迎えられた方も多いのでは
ないでしょうか。二〇世紀最後の年
読者の皆様にとってよい一年となり
ますようお願いいたします。
二〇〇〇年といえば避けて通れな
いいわゆる二〇〇〇年問題がありま
した。本誌編集部と文部省のコンビ
ュータ二〇〇〇年問題対策室とは同
じ部屋にあり、年末が近づくにつれ
その緊張が高まる様子を間近で見
てきました。文部省だけでなく各
省庁も不測の事態に備え、年末年始は担
当職員が泊まり込むなどの体制をと
っていたこともあり、震が関東わい
は例年の年末年始とは違った風景に
なっていたようです。
▽さて、二〇〇〇年最初の特集は「国
際文化交流の推進」です。我が国が
二一世紀の新しい文化を創造し、文
化による国際貢献を果たしていく上

で、国際文化交流の推進は不可欠の
ものです。そこで特集は、我が国文
化の各分野における国際交流の現状
を紹介するとともに、その推進にあ
たる行政の役割などを紹介する内
容となっておりますので御一読くだ
さい。
▽読者の方から「記念館めぐり」で
紹介してほしい記念館の御要望を
いただきました。近いうちにぜひ紹
介したいと考えております。御要望
はできるだけおこたえしていきたい
と思っておりますので、巻末のアン
ケートはききお送りください。
最後にになりましたが、本誌にと
つても充実した一年となるようがんば
ってまいりますので、今年もよろし
くお願いいたします。(K・M)
おわびと訂正 平成二年二月号五頁中「鈴
木明憲」は鈴木昭憲、九頁下段中「ロバート・
ハッケンス」は「ロバート・ハッチンス」の誤り
でしたので、訂正しおわび申し上げます。

投稿歓迎
「読者からのたより」欄への投稿、「文部時
報読者アンケート」を歓迎します。本誌を
●「読者からのたより」投稿規定
①1件につき400字以内 ②住所、氏名、年
齢、職業、電話番号を明記(誌上匿名可) ③
掲載分には薄謝進呈
●文章を一部手直しさせていただくことがあ
ります。
〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-2
文部省大臣官房政策課「文部時報」編集部
電子メールでも受け付けております。
●「文部時報読者アンケート」
文部時報読者アンケートは添付のはがきの
かに電子メールでも受け付けております。
宛先名「jiho@monbu.go.jp」

コンピュータネットワークを
利用した文教行政の広報
文部省では、我が国の文教施策等を広く皆
に紹介するため、インターネットホームペ
ージを利用して情報を提供しています。また、
子どもホームページ試行版を設け、情報を提
供しています。
ホームページアドレス：
http://www.monbu.go.jp/(半角入力)
子どもホームページアドレス：
http://www.monbu.go.jp/kodomohp/index.htm

●著作権所有——文部省◎
●発行所——株式会社 きよせい
本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16
電話 03-5349-6666(営業部)
URL http://www.gyosei.co.jp
●印刷所——株式会社行政学会印刷所
平成12年1月10日印刷
平成12年1月10日発行
定価610円(本体581円)(〒84円)
年間購読料7,320円
・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書
店にてお願いします。

本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。
Printed in Japan 2000 ISSN 0916-9830 ●この刊行物は再生紙を使用しています。